

ダニエル書11章1-20節 「ギリシアの君の戦い」

はじめに: 霊の戦い

1A ペルシアからギリシア 1-4

2A 南北の王の抗争 5-20

1B 南の王の優勢 5-9

2B 北の王の優勢 10-20

本文

ダニエル書 11 章です。ついにダニエル書後半、預言部分のクライマックスの部分に入ります。ダニエルが自分の生涯でおそらく最後に見た幻であり、そしてダニエル書の中にある数々の夢や幻の集成とも言うべき大きな幻です。私たちは前回から、ダニエルが見た最後の幻を読んでいます。それは「大きな戦い」についてのことで、ダニエルは 10 章 1 節で言いました。ダニエルが生きていた、ペルシアの初代王キュロスの治世以後に起こる、ギリシアのセレウコス朝とプトレマイオス朝の間で繰り広げられる戦争がその主な内容です。

はじめに: 霊の戦い

けれども、その目に見える戦いの背後には、目に見えない天使たちの熾烈な争いがあったことを 10 章で学びました。最後の部分がとても大事なので、もう一度読みます。「10:20-21 すると彼は言った。「私がなぜあなたのところに来たか、知っているか。今、私はペルシアの君と戦うために帰って行く。私が去ると、見よ、ギリシアの君がやって来る。21 しかし、真理の書に記されていることを、あなたに知らせよう。私とともに奮い立って、彼らに立ち向かう者は、あなたがたの君ミカエルのほかにはいない。」悪の勢力として、ペルシアの君がおり、次にギリシアの君が出てきます。そこに、イスラエルのために戦う君、ミカエルがいて、他に、加勢する御使いがいないと言っています。そこで、今、ダニエルがいる、キュロスの治世から起こる真理を、この御使いが伝えていきます。あるいは、主イエスご自身がその使いかもしれません。

いずれにしても、主は、キュロスをメシアご自身の救いの働きであるかのように、イザヤの預言には、彼が油注がれたもの、メシアとまで呼ばれています。捕らわれていたバビロンを打ち砕き、ご自分の民を解放し、エルサレムに帰還して神殿を建てるように布告を出したのが、キュロスです。それが、出エジプトの時と同じような救いであり、罪の縄目から解き放ち、神への礼拝へと導く方として、まさにキリストご自身の救いを表しているのです。

ところが、それを猛烈に阻むような勢力が、ペルシアの君であり、次にギリシアの君なのです。ユダヤ人が帰還してエルサレムを再建してもそこには困難が待っており、ギリシアの時代に至って

は、これから見てきますが、彼らの戦争の現場に無理やり置かれて、それから、荒らす忌まわしい者が出て来て、聖所を根こそぎ覆すことを行います。このようにして、神の救いのご計画を何とかして阻もうとする悪の勢力がいて、激しい霊の戦いがあるということです。

私たちも、教会の福音の働きには、激しい戦いがあります。すんなり救いが起こって、人々が信仰に立っているということにならないのが、教会の現場です。パウロは、信じたばかりのテサロニケの人々から引き離されて、彼らが苦難に遭っているのに、行くことができないもどかしさを、次のように言い表しています。「Ⅰテサ 2:18 それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。私パウロは何度も行こうとしました。しかし、サタンが私たちを妨げたのです。」このようにして、信じようとしている人を妨げ、また信じた人々から、みことばの種をつまみ出そうとしているのが、サタンであります。

ここで忘れてはならないのは、ダニエルが紀元前 534 年頃にこの幻を受けたということです。二世紀後に起こる出来事を、まるで詳細な古代ギリシア戦争史を辿るかのように読んでいくことができます。普段は、ここにあそこに矛盾があると言う聖書批評家は、この箇所に入ると何も言えなくなり結局、「全てのことが起こった後で、これらを書き記したのだ。」という言い逃れをします。しかし、それこそが主の目的でもあります。神がご自分こそが生ける方であることを証しされるためです。「イザ 46:9-10 遠い大昔のことを思い出せ。わたしが神である。ほかにはいない。わたしのような神はいない。10 わたしは後のことを初めから告げ、まだなされていないことを昔から告げ、『わたしの計画は成就し、わたしの望むことをすべて成し遂げる』と言う。」終わりに起こることを、初めから告げることによって、この方こそまことの神であることを示されます。

そして、「真理の書に記されていること」と御使いは言っています。真理を伝えることは、時にとても苦しい作業です。ユダヤ人に起こることをダニエルだからこそ受けとめることできる、神に愛されている者だからということでもあります。これまでの夢や幻ですでに示されたことを、より明らかに示されていきます。アンティオコス・エピファネスが現われること、そして彼が神の民と神殿を荒らすこと、そして彼を原型とする反キリストが終わりの日に現われること、けれどもキリストご自身が反キリストを滅ぼされること。これらを 11 章そして 12 章で詳しく見ることができます。そして、その中でユダヤ人が、いかに生きていくのかをさりげなく出しています。このような国の興亡の中で、権力者たちの戦いの中でどう生きるべきなのか、その指針も示されています。

1A すでに起こった事 1-35

1B ペルシアからギリシア 1-4

¹私はその彼を強くし、力づけるために、メディア人ダレイオスの元年に立ち上がった。」

「私」とは、10 章に現われた御使い、あるいは主ご自身のことです。ミカエルとともにペルシアやギリシアの君どもに立ち向かう方です。彼が初めに、「その彼」を強くしました。ダニエル書 6 章に

て、バビロンの崩壊後、王になった人ダレイオスの元年に、ミカエルを強くしました。ダニエルが獅子の穴から救われたことというのが、ミカエルまたは、この御使いが関わっている可能性があります。バビロンが倒れた直後から、すでに霊の戦いは始まっていました。

²「今、私はあなたに真理を告げる。見よ。なお三人の王がペルシアに起こり、第四の者は、ほかのだれよりも、はるかに富む者となる。この者がその富によって強力になったとき、全世界を、とりわけギリシアの国を奮い立たせる。

ここからは未来の話です。だから「あなたに真理を告げる」と強調しています。これから起こる三人の王とは、今はキュロスですから彼は含まれていません。その後の三人は、「カンビュセス」「スメルディス」そして「ダレイオス」です。そして「第四の者」とはダレイオスの息子クセルクセスのことです。エステル記に出てくる王のことです。彼の時代がペルシアの中で最も富み、強力になりました。彼がギリシアへ遠征に行きました。あの有名なスパルタとの戦いがその一つです。けれども遠征は成功しませんでした。エステル記1章で王妃ワシュティを罷免して、2章で国中の女を捜してついにエステルを王妃にした話がありますが、その1章と2章の間に遠征を行なったものと思われる。ですから、すべてが預言どおりになりました。

³ 一人の勇敢な王が起こり、大きな権力をもって治め、思いのままにふるまう。⁴ しかし彼が起こったとき、その国は崩壊し、天の四方に向けて分割される。その国は彼の子孫のものにはならず、また、彼が支配したほどの権力もなくなる。彼の国は根こそぎにされ、その子孫以外の者のものとなる。

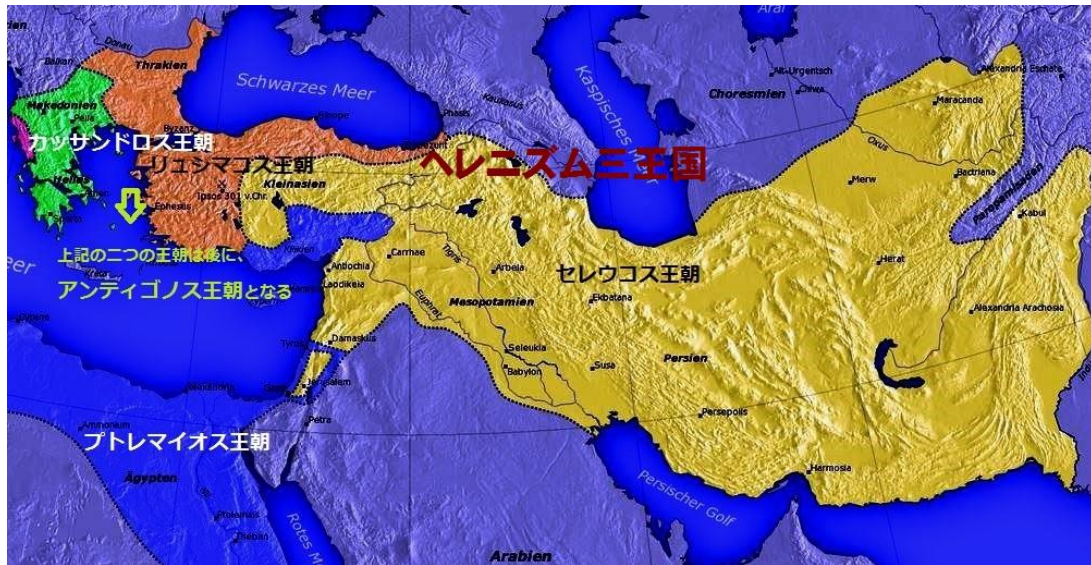
「一人の勇敢な王」とはアレクサンドロス大王です。彼が起こしたペルシアに対する戦争は、クセルクセスに対する復讐とされています。彼は3節にあるとおり、「大きな権力をもって治め、思いのままにふるまう」ことをしました。これからさらに勢力を増し加えてもおかしくありませんでしたが、彼は若くして夭折し、それで四人の総督に国が分割されました。「彼の子孫のものにはならず」とありますが、アレクサンドロスには幼少の息子たちがいましたが殺されています。総督同士の戦争が始まります。そこで「彼の国は根こそぎにされ」た、とあります。

2B エジプト・シリア戦争 5-20

そして5節から20節までは、アンティオコス・エピファネスに至るまでのプトレマイオス朝とセレウコス朝の戦いが描かれています。ギリシアは四つに分割されましたが、主な国はシリアのセレウコス朝とエジプトのプトレマイオス朝です。セレウコス朝が「北の王」と呼ばれ、プトレマイオス朝が「南の王」と呼ばれます。

そして、ここで最も大事なのが、その間にイスラエルがあるということです。その国が、「麗しい国」と11章で呼ばれます。この間を何度も、南と北の王が行き来して、荒らしていくことです。ギリ

シアの君がすでに、その背後にすることがお分かりになるでしょう。元々、イスラエルという国が、南はエジプト文明、北はメソポタミア文明に挟まれており、大国の興亡の通過地点になっていました。それは、通商による富も得ることができる利点もありましたが、戦いの間に挟まれるという地理的な状況もありました。その戦いで起こっていることを描いているのが、旧約聖書と言っても過言ではありません。新約時代のローマ帝国になるまで、その戦いは続いて行ったのです。



1C 南の王の優勢 5-9

⁵ 南の王が強くなる。しかし、彼よりもその軍の長の一人が強くなり、彼の権力よりも大きな権力をもって治める。

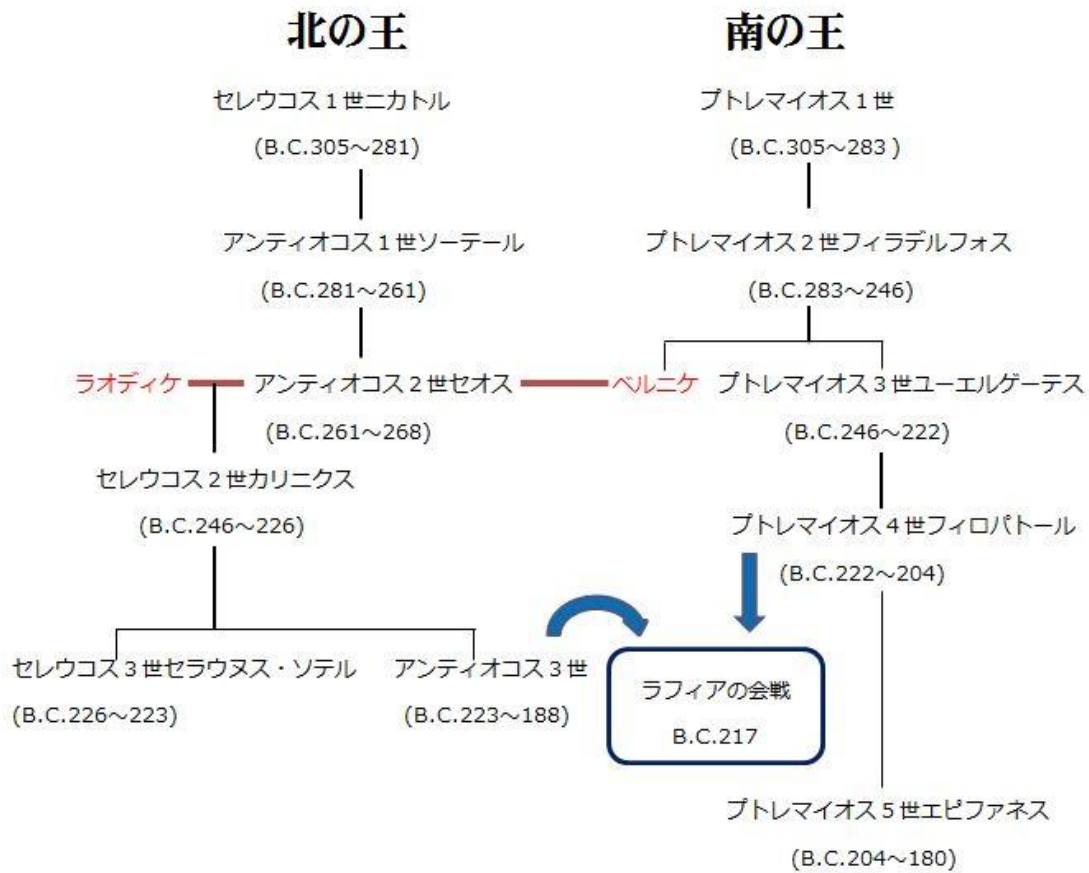
「南の王」はプトレマイオス一世(ソーテール)です。そして「その軍の長の一人」とは、セレウコス一世(ニカトール)です。彼がセレウコス朝の初代の王となります。セレウコスは、バビロンにいるもう一人の総督アンティノゴスに攻められます。それでセレウコスは、プトレマイオスに助けを求めました。そして共同でアンティノゴスと戦い、打ち勝ち、バビロンに戻りました。その後、セレウコスは勢力を増し、プトレマイオスよりも大きい領土を支配し、強くなりました。ここに書いてある通りです。

⁶ 何年かたって、彼らは同盟を結ぶ。和睦をするために南の王の娘が北の王に嫁ぐが、彼女の勢力は保たれず、彼の勢力も続かない。彼女は、自分を連れて来た者、自分を生んだ者、そのころ自分をかづけた者とともに引き渡される。

「何年かたって」とありますが、5節から時間が経っています。プトレマイオス一世は死に、息子プトレマイオス二世(ピラデルポス)が治めました。一方セレウコス一世は殺されて、息子アンティオコス一世(ソーテール)が王となりました。その後、セレウコスの息子アンティオコス二世(セオス)が王となり、このアンティオコス二世とプトレマイオス二世の仲が悪かったのです。その打開策とし

¹ <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E7%B5%82%E3%82%8F%E3%82%8A%E3%81%AE%E6%97%A5%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%E3%81%AE%E5%B9%BB%20%28%29%E5%B9%BB%E3%81%AE%E8%A7%A3%E9%87%88%E3%80%94%E3%80%95>

て、政略結婚によって同盟を結びました。プトレマイオス二世の娘ベルニケを、アンティオコス二世に与えたのです。



2

ところがここに書いてあるとおり、ベルニケもアンティオコス二世も勢力を保たれませんでした。なぜなら、アンティオコス二世の元妻、ラオディケがいたからです。プトレマイオス二世がベルニケをアンティオコス二世に与える時、アンティオコスの妻ラオディケと離縁するように命じました。そしてアンティオコスはベルニケと結婚したのです。

プトレマイオス二世が二・三年後に死にました。そこでアンティオコス二世はラオディケとよりを戻しました。ところがラオディケは自分が離縁されたことに対して復讐して、ベルニケとアンティオコス二世、そしてベルニケとアンティオコスの間に生まれた赤ちゃんを殺したのです。だからここに、「彼女は」とは、ベルニケ自身のこと。「自分を連れて来た者」はアンティオコス二世で、「そのころ自分をカづけた者」とは、ベルニケとアンティオコス二世の間の赤ちゃんのことです。カづけた者はその赤ちゃんです。そして「自分を生んだ者」とは父プトレマイオス二世です。

⁷しかし、彼女の根から一つの芽が父に代わって起こる。そして北の王の軍に立ち向かい、その砦に攻め入り、これと戦って勝つ。⁸ なお、彼は彼らの神々を、彼らが鑄た像や、銀と金の尊い器とと

² 同上

もにエジプトに捕らえ移す。彼は何年かの間、北の王と関わりを持たない。⁹しかし、北の王は南の王の国に侵入し、そして自分の地に帰る。

6 節からまた世代が変わります。「この女の根」とはプトレマイオス二世ですが、「芽」はベルニケの兄弟プトレマイオス三世(エウエルゲテス)です。彼が、ラオディケの息子、セレウコス二世(カリノコス)に対して戦争をします。大勝利に終わりました。セレウコス二世の母ラオディケを殺すことができました。そして、彼はエジプトには必要な神々を、シリアの地から分捕り品として運び去りました。2500 ほどあったそうです。かつてペルシアのカンビュセス王がエジプトを攻めた時に持っていった偶像もその中に含まれていました。四万タラントの金を運び去ったそうです。それから、セレウコス二世はエジプトに戦いに行きます。9 節に「南の王の国に侵入し」たとあるとおりです。けれども大きく負けてしまい、撤退しています。

2C アンティオコス大王 10-20

¹⁰ しかし、その息子たちは戦いを仕掛け、おびたしい数の強力な大軍を集める。進みに進んで押し流すように越えて行き、そうしてまた敵の砦に戦いを仕掛ける。

ここからまた新しい世代の戦いが始まります。アンティオコス大王の勢力です。「その息子たち」とありますが、カリノコスの息子がセレウコス三世(ソーテール)とアンティオコス三世(大王)です。セレウコス三世はすぐに戦死してしまいましたが、もう一人の息子アンティオコス大王が当時の王プトレマイオス四世(フィロパトル)に戦争をしかけました。彼は、プトレマイオス三世の息子です。フィロパトルはかなり怠惰な人間だったそうで、国内に混乱がありその機会を狙いました。そしてのガザまでシリアの領域に入れました。こうやって、ユダヤ人たちの住むところにまでシリアの影響が及び始めます。

¹¹ 南の王は大いに怒って戦いに出て来て、彼と、すなわち北の王と戦う。北の王はおびたしい大軍を起こすが、その大軍は敵の手に渡される。¹² その大軍を打ち破ると南の王の心は高ぶり、数万人を倒す。しかし、勝利を得ることはない。

フィロパトルはアンティオコス大王と、今のエジプトとイスラエルの国境の町ラフィアで戦いを行いました。それぞれ七万人の兵がいました。結果はエジプト側の勝利です。「数万人を倒す」とあるとおりです。けれども彼はアンティオコス大王を追い続けませんでした。「勝利を得ることはない」とある通りです。

¹³ 北の王が再び、以前より大きな、おびたしい大軍を起こして、何年かの後、大軍勢と多くの武器をもって攻めて来るからである。

アンティオコス大王はしばらくエジプトから手を引き、東方に領域を広げていました。その間、武

力と財力を蓄えました。フィロパトルが死に、その息子プトレマイオス五世(エピファネス)がたった五歳で即位しました。それでアンティオコス大王は大規模な軍をエジプトに送りました。

¹⁴ そのころ、多くの者が南の王に反抗して立ち上がり、あなたの民の暴徒たちも、高ぶって幻を実現させようとするが、失敗する。

エジプトに敵対するのはシリアだけではなく、ギリシアにもいました。

そしてユダヤ人たちもアンティオコス大王に協力してエジプトに反抗しました。「幻を実現させようとする」とありますが、これらユダヤ人は、セレウコス朝からもプトレマイオス朝からも自由になり、独立できるという幻であると考えられます。独立と武力に訴える人々は、ユダヤ教の中にありましたね。熱心党です。この中間期と呼ばれる、旧約聖書と新約聖書の間の時代に、新約聖書に現れるユダヤ教の宗派が形成されていきました。

彼らの行動は、主の目にとっては短絡的であり、アンティオコス大王にくみすることが「高ぶって」と責めています。後に、アンティオコス・エピファネスにくみする者たちが出てくるので、同じ過ちです。ここに大きな教訓があります。信仰の共同体であるユダヤ人が、政治的思惑によって動いたことです。権力者の高ぶりを自分たちの中にも取り入れてしまったのです。

¹⁵ しかし、北の王が来て壘を築き、城壁のある町を攻め取ると、南の軍勢は立ち向かうことができず、精兵たちでさえ立ち向かう力がない。

アンティオコス大王は、エジプトの将軍スコパスをシドンにて降伏させました。この「城壁のある町」とはシドンのことです。そして「精鋭たち」とありますが、スコパスを救出しようとした人たちがいましたが、その作戦は失敗しました。

¹⁶ そのようにして、これを攻めて来る者は思いのままにふるまう。彼に立ち向かう者はいない。彼は美しい国にとどまり、自分の手で滅ぼし尽くそうとする。

この最後の部分は新共同訳ですと、「彼は支配を確立し、一切をその手に収める。」とあります。アンティオコス大王がエルサレムに来て、ユダヤ人に優遇処置を行なったそうです。自分の戦いに加わって、共に戦ってくれたからです。けれどもこの時点で、イスラエルの地がシリアの影響下に置かれます。そして後に、アンティオコス・エピファネスがこの地を踏みにじります。今、ユダヤ人に味方して、保護しているからと言って、ずっとそうなのではないということを、信仰者である私たちも知らないといけません。私たちが頼るべきは、力ではなく主の御名のみであります。

¹⁷ 彼は自分の国の総力を挙げて攻め入ろうと決意し、まず相手と和睦して娘の一人を与え、その

国を滅ぼそうとする。しかしそれは成功せず、彼の思いどおりにはならない。

アンティオコス大王は、当時、まだ七歳だったプトレマイオス五世エピファネスに、自分の小娘クレオパトラを与えました。(私たちに有名なのはクレオパトラ七世ですが、彼女ではありません。)それによってエジプトにシリアの影響力を広げようとしたのです。「その国を滅ぼそうとする」とあるとおりです。ところが、クレオパトラはなんと自分の夫プトレマイオス・エピファネスについてしまいました。それで成功しませんでした。

¹⁸ それで彼は島々に顔を向け、その多くを攻め取る。しかし、ある指揮官が彼に侮辱をやめさせるばかりか、かえってその侮辱を彼の上に返す。

彼は地中海の島々に目を向けました。そしてローマの将軍ルキウス・スキピオが彼の所に来た時に、「あなたがたローマには、アジアのことは分からない。」とあしらったそうです。けれども、後にギリシアにおける戦いで同じローマの将軍スキピオに敗れてしまいました。そこで「かえってその侮辱を彼の上に返す」とあるとおりです。この時期に、世界の力がギリシアからローマに移っています。ネブカドネツアルの夢で、腹とももの青銅から脚の鉄に変わったのを読みました、その兆しを見ます。

¹⁹ 彼は自分の国の砦に引き返すが、つまずき、倒れていなくなる。

これで 10 節から始まるアンティオコス大王の生涯は終わります。彼はエラム州にある宮を略奪しようとした時に殺されました。もし彼がローマの影響下にある地中海の島々やギリシアに遠征にいかなければ、名前のごとく「大王」でいたでしょう。このように、高ぶりは破滅に先立ちます。

²⁰ 彼に代わって、一人の人が起こる。彼は国の栄光のために、税を取り立てる者を行き巡らす、数日のうちに、怒りにも戦いにもよらずに滅ぼされる。

アンティオコス大王の息子セレウコス四世(フィロパトル)が王となりました。ローマが勢力を持ち、シリアに対して年に一千タラントの貢物を要求しました。そこでイスラエルに対して重税を課しました。そのためにヘリオドロスを取り立て人として遣わし、神殿から財宝を奪い取ることになっていました。けれども、その間にセレウコス四世が死にます。ヘリオドロス本人に毒殺されたのです。ですから、「怒りにもよらず、戦いにもよらないで、破られる」とあるとおりです。

そこで、セレウコス四世に代わる後継者が現れないといけません。そこから、結局出てきたのが、アンティオコス四世、すなわち、アンティオコス・エピファネスです。こうして、イスラエルには試練と苦難が来ます。ギリシアの君が、ユダヤ人を南北の王の戦いに巻き込ませています。この時にいかに、主のみに仕えていくことができるのかが試されます。